

平成19年12月8日

明日香村教育委員会

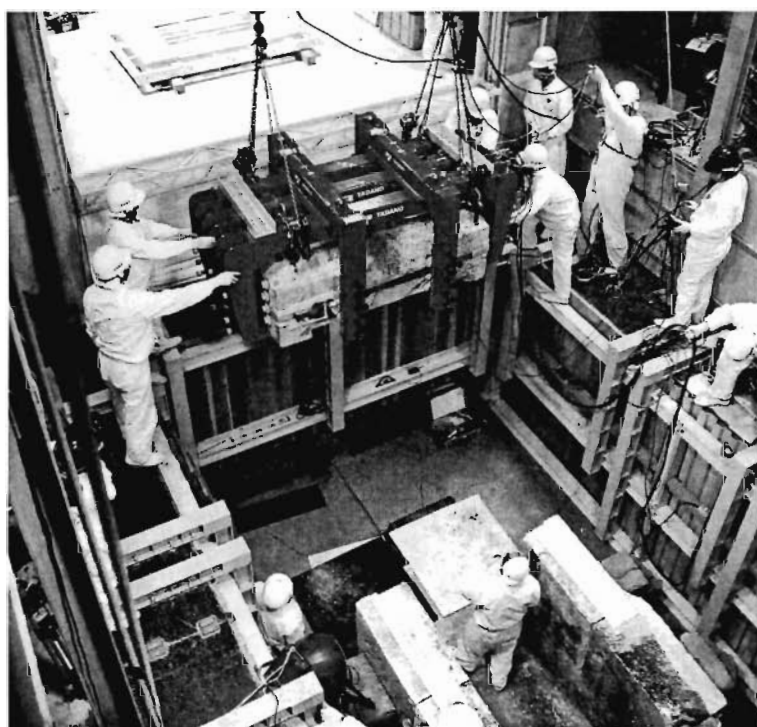
明日香村発掘調査報告会

2007

開 会 1:00~

調査報告 1:10~ 「竹田遺跡の調査」 高橋 幸治

「高松塚古墳の調査」 相原 嘉之



講演 2:50~

「高松塚古墳の解体問題と壁画の意味」

講師 河上 邦彦 氏

明日香村文化財顧問

神戸山手大学教授

竹田遺跡（2007－4次）の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字東山

調査原因：範囲確認調査

調査面積：約 720 m²

調査期間：2007年6月1日～継続中

はじめに

竹田遺跡は飛鳥寺から北東へ約 200mの距離にあたり、現在の八釣集落より西の狭小な丘陵部南側に所在する。南には飛鳥坐神社が、北西には中世の砦的な性格である飛鳥城がある。また南東の大字小原には藤原鎌足公誕生地や大伴夫人之墓があり、付近が中臣氏の本拠地であった可能性が考えられている。調査地のすぐ南の道路は飛鳥寺旧境内の北面大垣の延長で、そのまま東へと進むと、八釣集落を経て桜井市高家方面へと続く。小字「竹田道ヨリ北」などから、この道は「竹田道」と呼ばれていたことが窺い知れる。

『万葉集』巻三 262 首に「矢釣山」を詠った歌があり、これは柿本人麿が天武天皇と藤原夫人（ぶにん・おほとじ）五百重娘（いほへのいらつめ）との間に生まれた新田部皇子に献った反歌とされ、このことから、新田部皇子の邸宅が現在の八釣集落近辺に所在した可能性が指摘されていた。

竹田遺跡の範囲確認調査は、平成 18 年度より実施し、これまで 2006－4 次調査、2006－11 次調査として行った。そこでは 7 世紀後半を中心とした掘立柱建物群や平安時代から中世の掘立柱建物などを検出した。また、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、墨書土器、瓦器、瓦、セン、鞆羽口、鉄滓、石器、石材、土馬、埴輪などの遺物も出土している。検出された建物群の中には、飛鳥地域の中でも比較的大形の柱穴をもつ建物があったことから、これらが皇族や高位高官などの邸宅である可能性が推定されてきた。

今回の調査は、前回までの調査区よりさらに西にあたり、西区 360 m²、東区 360 m²を設定し、合計 720 m²を調査した。

主な検出遺構

今回の調査では掘立柱建物 6 棟、掘立柱塀 1 条を検出した。これらは大規模な土地造成を施して建てられている。

建物① 東区で検出した南北二間×東西五間以上の東西棟建物である。柱掘形の平面プランは隅丸方形で、一辺が 90～100cm を測り、深さ約 90cm である。柱痕跡は残存部分で、25～30cm である。柱間は心々で 240cm を測る。各柱穴の柱抜取穴からは、完形に近い砂岩切石が出土しており、柱穴の礎板石として利用されていた可能性がある。

建物② 東区で検出した南北一間以上×東西二間以上の建物である。柱掘形の平面プラ

ンは円形もしくは楕円形で、径約 70cm を測り、深さ約 20cm である。柱は全て抜き取られている。柱間は心々で 1.6～1.7m を測る。

建物③ 東区で検出した南北二間×東西二間以上の東西棟建物である。柱掘形の平面プランは隅丸方形で、一辺が約 35cm で、深さ約 60cm である。柱痕跡は残存部分で、径 15cm を測る。柱間は心々で 170～220cm であった。

建物④ 西区で検出した南北二間×東西一間以上の建物である。柱掘形の平面プランは隅丸方形で、一辺が 70～90cm を測り、深さ約 90cm である。柱痕跡は残存部分で、径 25cm を測る。柱間は心々で 210cm であった。

建物⑤ 西区で検出した南北三間×東西一間以上の建物である。柱掘形の平面プランは隅丸方形もしくは楕円形で、一辺が約 55～75cm を測り、深さ約 50cm である。柱痕跡は残存部分で、径約 15cm を測る。柱間は心々で 140～155cm であった。

建物⑥ 西区で検出した南北二間×東西二間以上の建物である。柱掘形の平面プランは円形もしくは楕円形で、一辺が 40～50cm を測り、深さ 50～55cm である。柱痕跡は残存部分で、径 15～20cm を測る。柱間は心々で 160cm であった。

塀 ① 西区で検出した逆 L 字形に折れる塀である。東西方向に三間以上、南北方向に三間以上分を検出した。柱掘形の平面プランは、隅丸方形もしくは楕円形で、一辺が 75～80cm を測り、深さ約 55cm で検出している。柱痕跡は残存部分で、径約 15cm を測る。柱間は心々で 210～220cm であった。

その他に、性格不明の土坑や、素掘り溝などを多数検出している。

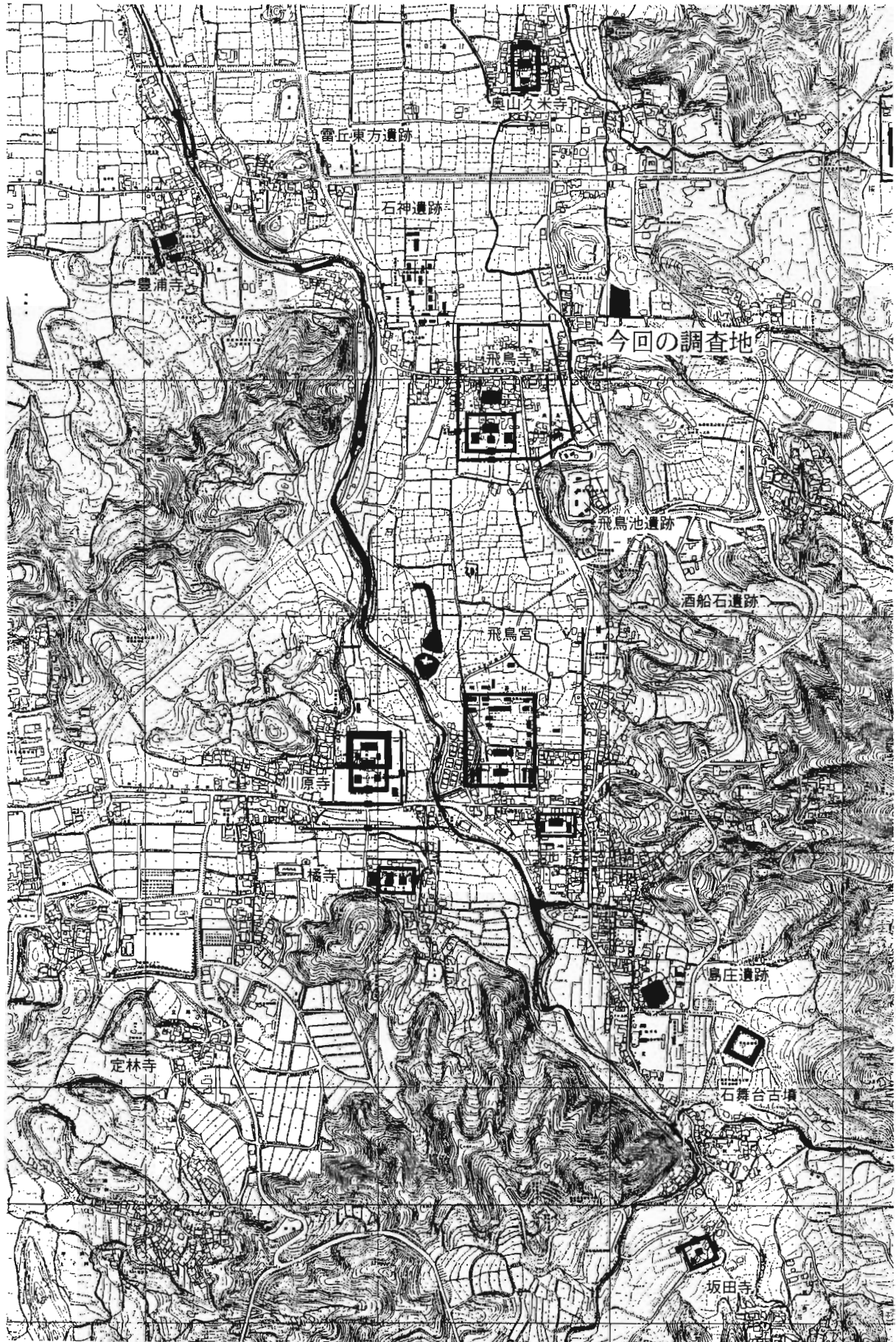
主な出土遺物

今回の調査では、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、石器、石材などが出土した。

まとめ

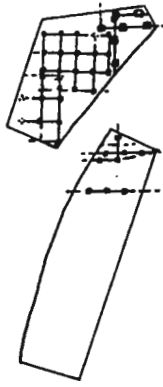
今回は、二カ所の調査区を設けて調査を行った。その結果、飛鳥時代に遡る建物群の一部が検出された。調査区が狭く建物配置などを明確に把握することはできなかったが、前回の発掘調査によって確認した飛鳥時代後半の建物群に関連した建物である可能性が高い。前回までの調査によって、近辺に皇族や高位高官の邸宅の可能性のある建物群を検出したが、今回の調査においても、関連性の窺える建物が検出された。今回の調査地が前回の調査地よりもさらに西側に位置することから、飛鳥時代の建物群の範囲は東西約 200m、南北約 60m と推定される。

これまでの調査によって、飛鳥周辺の狭小な丘陵部に飛鳥時代の邸宅があった可能性が高まったことや、こういった地域での土地利用状況の一端が明らかになったことから、当時の宮都の空間構造を考える上で重要な資料を提供できたという成果が得られた。



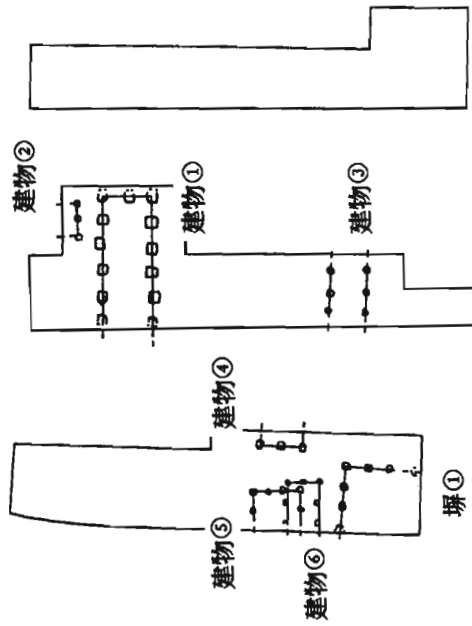
竹田遺跡調査地位置図

2006-11次調査

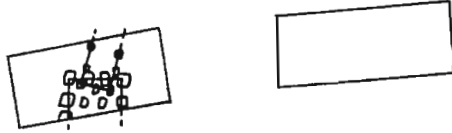


東区

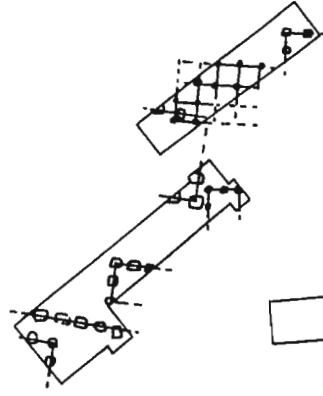
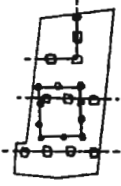
西区



2006-4次調査



2006-4次調査



今回の調査

竹田遺跡遺構略測図

特別史跡 高松塚古墳の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字平田444

調査原因：石室解体修理に伴う事前調査

調査面積：43.2m²

調査期間：2006年10月1日～2007年9月4日

はじめに

この調査は石室解体に伴い、大字平田444で行った調査である。調査は文化庁の委託を受けた奈良文化財研究所に、橿原考古学研究所・明日香村教育委員会が共同して実施した。

高松塚古墳は昭和47年に発掘調査がなされ、その調査によって石室内に壁画が描かれていることが判明した。壁画は石室内全面に漆喰を塗り、その上に玄武・青龍・白虎・星宿・日月像・男女子群像が描かれている。本格的な壁画古墳としては、我が国初の確認であり、その保存と管理は国へと委ねられることになった。石室の前面には保存施設が設けられ、石室と外界との緩衝空間となり、狭小な石室内では、壁画の剥落を防ぐ修理が10数年をかけて実施された。

しかし、壁画の発見から30数年を経て、石室内の保存環境は著しく変化をしていた。石室温度が上昇し、カビなどの微生物やムシなどが頻繁に出現するようになった。さらに壁画や壁面の漆喰も劣化が激しいことが判明した。このため文化庁は検討会を設置し、壁画保存へ向けて、様々な方法を検討したが、現地保存は困難と判断され、石室の解体修理が選ばれた。

石室を取り出すための調査区は、墳丘の掘削を最小限にとどめ、作業の安全性を確保するために、二段掘りとした。調査面積は上段7.2×6m、深さ2.7m、下段5.2×4m、深さ2.5mの43.2m²である。

上段調査区の発掘調査

上段調査区は7.2×6mの調査区で、墳頂部から深さ2.7mまで掘削した。発掘調査では古墳築造にかかわる、いくつかの新見知を確認することができた。

墳丘は土を突き固めた版築工法で築かれている。突棒で固めながら積み重ねたもので、一層の厚みは3～5cmである。墳丘の下半部の版築面には各層にムシロを敷いた痕跡が見られる。これは斜面に版築を施す際に、ムシロの摩擦を利用して土がずれずに、版築を行うためと考えられる。墳頂下2.3mで、石室を覆う白色粘土の版築層が土饅頭のように検出された。上部の版築層に比べると、2倍ちかい硬度をもち、石室の構築と一体的に積まれている。

墳丘の版築層を掘り下げる過程で、版築層を突き破る多数の地割れ・亀裂が確認された。この亀裂内には柔らかな土が充満しており、そこに植物の根が伸びていき、さらにそれが腐ると空洞となっている。

これらと同時に、昭和49年に設置された保存施設の取り合部の設置状況についても確認した。取り合部の屋根は発掘区の形状に合わせて設置している。屋根と旧発掘区の間隙となる部分には、新たに凝灰岩切石ブロックを並べ、隙間を塞いでいる。さらにこの切石を覆うように粘土を貼り付けている。この上に互層に土を積み、ポリプロピレン・シートを敷いている。しかし、

設置後30数年を経ていることもあり、粘土が劣化してひび割れ、そこに隙間が生じていた。この隙間からムシや水が侵入していることも明らかとなった。

下段調査区の発掘調査

下段調査区は上段調査区からそれぞれ1m控えた5.2×4mの調査区で、さらに深さ2.5m掘削した。この発掘調査では古墳築造や石室構築にかかわる、いくつかの新見知を確認することができた。

下段調査区では白色版築層で、約70cm下にある石室を堅固に保護している。版築の一層の厚みは3～5cmで、突棒やムシロの痕跡が同様にみられる。突棒の痕跡は径4cm前後の窪みで、高い方から低い方へと規則正しく突かれており、作業単位や施工順序が伺える。

墓道部（棺を石室へと運び入れる通路）は昭和47・49年の調査ではほぼ完掘されていたが、わずかに残る北西隅部を調査した。墓道は白色版築層から掘り込まれており、再び版築で丁寧に埋め戻され、さらに墳丘全体を版築で覆っている。墓道埋戻しの版築層には径4.5cmの突棒痕跡が残されており、壁面には掘削に使用された工具の痕跡も認められる。墓道の幅は約3m（10尺）である。また、地震による亀裂は石室まで達しており、石室の輪郭に沿って亀裂が走っており、そこから放射状に広がっていることがわかる。地震によって石室が揺さぶられ、その影響を最も受けやすい石材の継ぎ目や石室と版築の境界に亀裂ができたと考えられる。

石室は床石4石、北壁石1石、東西壁石各3石、南壁（閉塞）石1石、天井石4石の凝灰岩切石で構成されている。石室内部の規模は幅103.5cm（3.5尺）、奥行き265.5cm（9尺）、高さ113.4cm（3.8尺）で設計されている。天井石は南から3石は幅180cm、長さ90cm前後、厚さ60cm程であるが、北端の天井石は幅160cm、厚み50cmと小さい石材を使用しており、何らかの理由により、転用石を利用したものと推定される。一方、壁石の厚みは36～50cmと不均一で、安定が悪い。

石室の構築過程

これらの発掘調査の過程で、石室の構築方法が判明した。床石は南北4石で構成されており、互いに合い欠きによって組み合っている。この合い欠きの構造によって、床石は南から北に向けて設置していったことがわかる。次に、床石の上面まで版築によって土を積み上げ、細部の加工を施す。特に、床石上面は石室内にあたる部分を削り残し、壁石が建つ部分を一段低く削っている。この加工時に、水平を設定するための水準（水測り）の杭跡が床石の周囲に残されており、その時にでた凝灰岩粉が周囲に大量に散布されている。壁石にも合い欠きが施されており、その構造から、北壁を設置後、東西の壁石を北側から順に設置していることが判明している。この時、南側の閉塞石は一端閉められている。その後石材の隙間を漆喰で目地止めし、同時に周囲を壁石の上面まで版築で積み上げていく。この面を利用して天井石を運び、組み立てている。天井石にも合い欠きがあり、南から設置していったことがわかる。東西側面の下端には各二つずつ抉り穴が掘られており、石材移動の微調整のために利用されたと考えられる。さらに目地を漆喰で止め、白色版築で全体（南天井石小口）を覆い隠す。

この後、墓道を掘削し、その床に並べていた4本の道板を利用して、一端閉じていた閉塞石を開封する。さらに石室内全面に漆喰を塗り、壁面を描く。南の閉塞石は別の場所で漆喰を塗り、朱雀の壁画を描いている。石室内には棺台を設置、漆塗木棺を納棺して葬送儀礼を行う。

儀礼終了後に再び閉塞石で封鎖して、墓道を版築によって埋め戻す。さらに全体を赤褐色の版築によって覆い、古墳が完成する。

壁画の保存影響

発掘調査では古墳の学術的な成果の他に、壁画の保存環境変化や地震の痕跡についても判明してきた。発掘調査前、石室の3次元測量によって石室が歪みながら傾いていることが判明していた。床石の高さで比較すると、北東隅よりも南西隅は7cm程低くなっている。石室は水準杭の発見によってもわかるように、本来は水平に設置されていたと考えられる。よって、この傾きは設置後に変化が起こったことになる。このことは石材と石材の隙間が大きく開いていることから推定できる。その要因としては、すでにみた版築を貫く亀裂でもわかるように、巨大な地震による影響と考えられ、奈良盆地では90～150年周期で襲う「南海・東南海地震」に起因すると考えられる。その時期は鎌倉時代の盗掘孔の時期よりも新しいことから、カヅマヤマ古墳の石室を崩壊させた正平南海地震（1361年）の可能性がある。

さらにこの地震による亀裂は石材間に隙間を生じさせ、石材外側の版築との間にも隙間を生じさせている。これまで約30年間に石室で発生したカビは、その都度、内部から除去・薫蒸等を行っていたが、この隙間を通して石材の外側までカビが広がっており、ここがカビの温床となっていたことがわかる。さらにこの隙間を通してムカデやゲジやクモなどが、石室内に侵入し、カビをまき散らした一因にもなっていた。

総括～まとめと今後の課題

今回の解体修理は、壁画を修理するために、石室ごと解体・搬出することが主目的であるが、その掘削される土の中には、重要な情報がたくさん包蔵されている。その情報の中には、高松塚古墳の築造方法や築造技術などの考古学的情報と、壁画が劣化したりカビやムシの侵入・繁殖する原因などの情報も含まれている。これらを解明することも重要な使命である。

高松塚古墳壁画の発見は考古学や文化財を一般に認知させ、その保存に国家プロジェクトとして、当時の最新の科学技術を駆使して実施されたことが、文化財保存の理念の確立につながっていた。しかし、発見から35年を経て、壁画は大きく劣化し、石室内の保存環境も著しく変化した。これらの原因については多くのことが指摘されている。漆喰層の物理的な劣化、壁画修理やカビの除去における使用薬剤の影響、石室の保存環境の維持など壁画の保存技術に困難な課題が多くあり、我が国において初めての経験であることから試行錯誤の連続であった。この他にも石室内点検時における損傷事故やその修復の未公表、墳丘と壁画の管理体制の違いによる情報の共有ができなかったことなど、管理体制や情報公開の不備も壁画を現状のように劣化させた一因である。また、壁画古墳が我が国に二つしかない希有な存在であったことから、保存施策に英断ができず、当初の方針を引きずっていたことも問題である。例えば、10年ごとに総括・検証を行い、次の10年の保存方針を検討することも必要であったのであろう。

今回の高松塚古墳の保存問題は、文化財保存の理念と技術、情報公開や管理体制など様々な課題を浮き彫りにした。これらは忘れかけていた、文化財と私たちのあり方を再考させるものである。今、再び国家プロジェクトとして壁画を守り、次の世代へと伝えていく努力が始まっている。多くの課題や反省を乗り越えて、もう一度文化財保存の理念の構築が始まった。

講演

「高松塚古墳の解体問題と壁画の意味」

明日香村文化財顧問

神戸山手大学教授

河上 邦彦 氏

高松塚古墳の解体問題と壁画の意味

河上 邦彦

高松塚古墳の石室解体と石材搬出作業は無事に全て終わった。壁画を守るためには解体やむなしとして発言してきた私もすこしほっとしている。文化庁や関係者も同じ気持ちであろう。しかし壁画の恒久保存のためにはまだその一步を踏み出したばかりである。解体という一見暴挙とも言える作業をおこなったのは、かび等の繁殖を押さえきれなくなり、壁画消滅の危機が迫っていたからであり、解体によって多少の時間的余裕が出来たにすぎない。壁画が外に出されて、環境が変わったので、かびの発生はなくなったようだ。しかし今後壁画がこれまで経験していなかった乾燥という問題にも対処しなければならないし、石材そのものがひび割れなどでかなり劣化が進んでいる等、今後の対応がかなり困難であることを予想させる。当面の修理・修復だけでも一〇年程度かかるとされているが、壁画がある限りはこうした保存修理の作業はその後も永久に続くのである。

石室を解体してまでなぜ壁画を残さなければならないのか、高松塚古墳は考古学の古墳という資料であり、歴史解明のために発掘された。発掘は破壊だと言われるように徹底した調査をすればその遺跡はなくなってしまふ。しかしその遺跡が日本歴史を語る上で重要であるならば、つまり文化財としての価値が残っている部分で発掘を止める。高松塚の場合、古墳そのものは記念物の特別史跡として、壁画は有形文化財としての国宝に指定されており、二重指定されていた。それだけ日本の歴史を語る上で不可欠の文化財だと認識されていたのである。しかしこれが裏目に出たのである。文化庁の記念物課と美術学芸課の縦割り行政のために壁画の劣化を早めたという結果になった。高松塚の石室解体とは、記念物としての石室を取るか、国宝の壁画を取るかという判断であったといえる。石室の中に壁画を置いたままにするという両立が出来なかったのである。その結果壁画を選択したということであり、かなり早い時期から文化庁は壁画を出すことを考えていたようだ。壁画は例が少ないが石室は他に似たものがある。そして解体しても組み直せば元通りになると考えたからであろう。そしてキトラ古墳でも剥ぎ取りと言う方法で壁画を出したことがこの考えの後押しをした。

文化庁は一応の修理が終われば石室は戻すと行っている。しかし保存科学関係者は再度かびの発生が考えられ、戻すことは難しいという。そして解体した物を元通りにすることが出来ないのは発掘によって破壊された部分があるからで、もどすというのは詭弁でしかない。墳丘の中にドームを作りかびなども生えないようにするという案もあるようであるが、このようなものを墳丘内に作ることは元通りにすることにはならない。

石室を解体したので特別史跡の指定を解除すべきであるという論もある。文化庁は将来石室を戻すのだから指定を解除するつもりはないらしい。自らが古墳の特別史跡指定の要素である石室を解体したのだから指定解除をすれば破壊を認めたことになると考えているのだろうか。私は指定の解除は必要ないと考えている。石室はなくなり、墳丘もかなり掘り荒らされた。しかし残された墳丘やその立地にまだまだ古墳としての歴史価値がある。そして、文化財保存のために石室を解体してまで壁画を残そうとした石室取りだした跡がある。遺跡は全て跡である。高松塚は平成の時代にも人々が壁画をのこそうとして働いた、その歴史痕跡を残しているといえるからだ。

石室をもともどすことができないということは新しい考え方が可能になる。高松塚古墳が世間から大きく非難されたのは発見から35年間非公開を貫いていたからである。それは物理的に公開出来なかったからであるが、国民が見ることが出来ないでいる内に壁画が劣化していたという非難である。解体の結果公開はやりやすくなった。博物館のような特別な施設を作り、そこで公開することが最善である。

今文化庁がやらねばならないのは壁画を少しでも35年前の状態に戻す努力をし、国民に出来るだけ早く公開することである。そうすることがこの壁画についての一連の問題に責任を取ったということになる。

取合部崩落止め工事および石室西壁の損傷事故の経緯

事	項	関係部署
昭和 59年10月 平成 2年12月 3年12月 9年3月 11年3月	取合部崩落写真 点検日誌で初めて崩落事実を確認 取合部の崩落程度合いを確認 崩落が小規模状態 美術工芸課長から記念物課に工事を依頼 するよう指示	美術工芸課 (美術学芸課) 東文研 記念物課
11年4月 5月 12年3月 6月 13年1月 2月	現地で初めて取合部工事の調査 (美・記・ 奈) 文化庁内で協議 (美・記) 定期点検・美術工芸課長が初めて取合部を 視察 現地で調査 (2回目) (美・記・奈・工・事 業者) 取合部工事契約手続き 特別記録の現状変更手続き	美術工芸課 (美術学芸課) 東文研 記念物課
13年2月	工事 (2/14~3/3) 美術学芸課理地立ち会い (考古調査官2名と主任、絵画主任) 取合部でカビを確認 (28日)	美術学芸課 (美術学芸課) 東文研 記念物課
13年3月 4月 5月 7月 8月	定期点検 (25~28日) 取合部に大量のカビ発生を確認 (美・東) 取合部点検 (8・9日) 文化庁長官に報告 (カビ関係) (10日) 取合部点検 (9~13日) 東京文化財研究所協議 (美・東) (10日) カビ協議・石室開封点検の協議	美術学芸課 (美術学芸課) 東文研 記念物課
13年9月 12月	石室内点検 (26~29日) 石室内にカビ発生を確認 (美・東) 石室内点検 (18日~21日) 石室内に大量のカビ発生を確認 (美・東) 青龍に吉一節を損 (東) 美術学芸課と東京文化財研究所の担当 者で点検に話し合いが行われる	美術学芸課 (美術学芸課) 東文研 記念物課

損傷事故の発生	14年1月	14年1月 2月 3月	14年4月 5月	14年10月 15年1月 3月 6月 16年1月 6月 8月 17年10月 6月	その後
点検作業に修理技術者が加わる 点検作業 (27~29日) (美・東) 損傷事故が発生 (28日) 西壁男子群像下方部 (午前) 西壁男子群像胸部 (午後) ・剥落防止措置 (当日)	美術学芸課内で損傷事故協議 (30日) 美術学芸課長が東文研所長に事故対応の 説明を行う (1日) 点検作業 (25~27日) (美・東) 西壁男子群像下方部の剥落止め 報道関係者に壁面写真を提供 撮影年月日の異なるものを提供 (美) 点検作業 (27~29日) (美・東) 損傷部分の撮影を行う (28日) 現地で東文研所長の了解もと実施 損傷箇所以外の撮影についても言及 (東文研所長)	点検メモ作成 撮影についての方針を確認 (美) 損傷部分以外の撮影を行う (2・2・3日) (美)	石室内に大量のカビを確認 (28~31 日) (美) 東京文化財研究所で協議 (5日) 取合部工事後の状況を公表 (12日) 緊急保存対策検討会 (第1回) (18日) 報告書公表 (26日) 取合部再工事 恒久保存対策検討会 (第1回) (4日) 「国宝高松塚古墳壁画」刊行 朝日新聞劣化報道 (20日~) 恒久保存対策検討会 (第2回) (10日) 保存管理の経緯等の公表 発掘調査 (~17年3月) 恒久保存方針検討会 (第4回) (27日) 石室解体方針決定	その後	

終末期古墳比較表

	キトラ古墳	石のカラト古墳	マルコ山古墳	高松塚古墳
位置	明日香村阿部山 ウエヤマ136-1	奈良市山陵町 別所谷1964	明日香村真弓 ミツツ146	明日香村平田 高松444
調査	昭和58年 平成9・10・13～16年 (1983・97・98・01～04)	昭和54年 (1979)	昭和52・53年 平成2・16年 (1977・78・90・04)	昭和47・49年 平成15～17年 (1972・74・03～05)
墳丘	二段築成の円墳 下段13.8m 上段9.4m 高さは西側で約3.3m 墳丘南斜面に石詰暗渠がある	上円下方墳 一辺13.8m 直径9.7m 高さ上段1.7m 下段1.2m 墳丘下・周辺に石詰暗渠がある。 墳丘に石を貼る	二段築成の六角形墳 下段約23.6m 上段約18m 見かけの高さ約5.3m 石敷下・墓道の下に石詰暗渠がある テラス・掘割底に礎を敷く	二段築成の円墳 下段約23m 上段18m 下からの見かけの高さ約8.5m
盛土	数cm単位の版築 上段の墳丘裾に板状痕跡と杭跡	数cm単位の版築状 墳丘全面に葺石	数cm単位の版築 基礎造成部に板状痕跡あり	数cm単位の版築
石材	凝灰岩切石 (二上山屯鶴峰)	凝灰岩切石 (二上山屯鶴峰)	凝灰岩切石 (二上山鹿谷寺)	凝灰岩切石 (二上山屯鶴峰)
石材個数	床石4 扉石1 奥壁2 天井石4 西側3 東側4 (計18石)	床石4 扉石1 奥壁1 天井石4 側石各3 (計16石)	床石4 扉石1 奥壁2 天井石4 側石各3 (計17石)	床石3 扉石1 奥壁1 天井石4 側石各3 (計15石)
石槨規模	長：240.0cm 幅：104.0cm 高：114.0cm 石槨内は家形(高さ10cm)	長：260.0cm 幅：103.0cm 高：106.5cm 石槨内は家形(高さ10cm)	長：271.9cm 幅：128.5cm 高：135.7cm 石槨内は家形(高さ7.6cm)	長：265.5cm 幅：103.5cm 高：113.4cm
漆喰	石槨内全面 (厚さ数cm)	なし	石槨内全面 (厚さ2～7m)	石槨内全面 (厚さ2～7m)
壁画	北壁 玄武・十二支 東壁 青龍・十二支 南壁 朱雀 西壁 白虎・十二支 天井 天文図 日像・月像	壁画なし	壁画なし	北壁 玄武 東壁 青龍・日像 男女子群像 西壁 白虎・月像 男女子群像 天井 星宿
遺物	漆塗木棺 金銅・銅製棺金具 金象眼帯執金具 鉄製大刀 琥珀・ガラス玉 人骨(熟年男性)	漆塗木棺 銀製大刀金具 金箱 琥珀・金玉・銀玉	漆塗木棺 金銅・銅製棺金具 金銅製大刀金具 金銅製尾錠 人骨(壮年男性)	漆塗木棺 202×57cm 金銅・銅製棺金具 銀製大刀金具 海獣葡萄鏡 琥珀・ガラス玉 人骨(熟年男性)

風水

ふうすい feng-shui

【定義】一狭義には、都市・寺院・住居・墓地などの立地選択の術。広義には、人間と環境・地景との良好な関係を追求するシステム、または大地の宇宙論的解釈。堪輿・地理・陰陽などともいい、その専門家を風水先生、南蛮子・山師・地官などと称する。風水の語は通帯、晋の郭璞に仮託される『葬書』（「葬經」ともいう）の次の句に由来するとされている。〈葬は生氣に乗るなり。…經に曰く、氣は風に乗らば即ち散じ、水に界されるれば即ち止まる。古人はこれを聚めて散ぜざらしめ、これを行かせも止まること有らしむ。故にこれを風水と謂う。風水の法、水を得るを上と爲し、風を蔵するはこれに次ぐ〉。

【歴史】一『尚書』召誥に、〈越に三王戊申、太保朝に洛に至り宅を下す。厥れ既にトを得れば即ち經營す〉、『詩經』大雅・公劉に、〈その陰陽を相し、その流泉を觀る〉などというように、良地の探求は古代から行われていた。このようになく言や直観に頼る狀地法が、氣論や陰陽五行説などと結合して一個の科学的地理術として確立されるのは、遅くとも漢代のことらしい（『論衡』譏日篇、詰術篇、『後漢書』袁宏伝などを見よ）。ついで魏晉南北朝時代に入り、風水術の開祖と目される郭璞や管輅などが現れて社会的にも隆盛に向かう。その後、宋代には楊筠松（救貧先生）・曾文遄・廖金精・賴文俊（布衣）の、いわゆる風水四大家が活躍し、一般の民衆にまで普及しはじめた（宋の羅大経『鶴林玉露』人集巻18・風水などを参照）。またこの時代には、山川の配置から吉地を帰納するいわば風景派（辨項）と、雜糅を重視する計劃派（理氣）との二学派が形成されている。後者には、朱子学の影響があるらしい。明代に、総合的な風水地理学の書『人子須知資孝地理心学統宗』（略称『地理人子須知』）が編まれたのも特記すべき事柄である。現代、中国大陸では封建時代の迷信的遺物として風水は駆逐されたかに見え、台湾や香港や韓国では、なおしぶとく命脈を保っている。また近年わが国においては、主として建築家やエコロジストの間で、危機に瀕編成する契機として、この中国の古い智慧に学ぼうとする動きが起こっている。そしてそれと連動するかのようになり、1989年、東京都立大学の渡辺欣雄（社会人類学者）によって『全国風水研究者会議』が組織されたのは、わが国の風水研究史上画期的な出来事である。

【システム】一風水説の基底にあるのは、有機的な大地観である。中医学では人体の中を氣のルートである経路が走っていると考えるが、これがそのまま大地にも適用され、擬似身体としての大地の中に龍脈（山脈、地脈）という生氣のルートを想定する。その生氣は大源泉である西方の崑崙山を發し、北条・中条・南条の三大幹龍を伝わって流れ下り、そこから枝わかれして中国全土の隅々に行きわたる。朝鮮の場合は、白頭山に發して智異山に尽きるとされる。ところで、生氣は龍脈の中を均質に流れているわけではなく、場所によっては濃密な生氣がわだかまっているところがあり、その地点を龍穴（人体における氣穴と照応）といい、風水術の眼目はこの龍穴を探

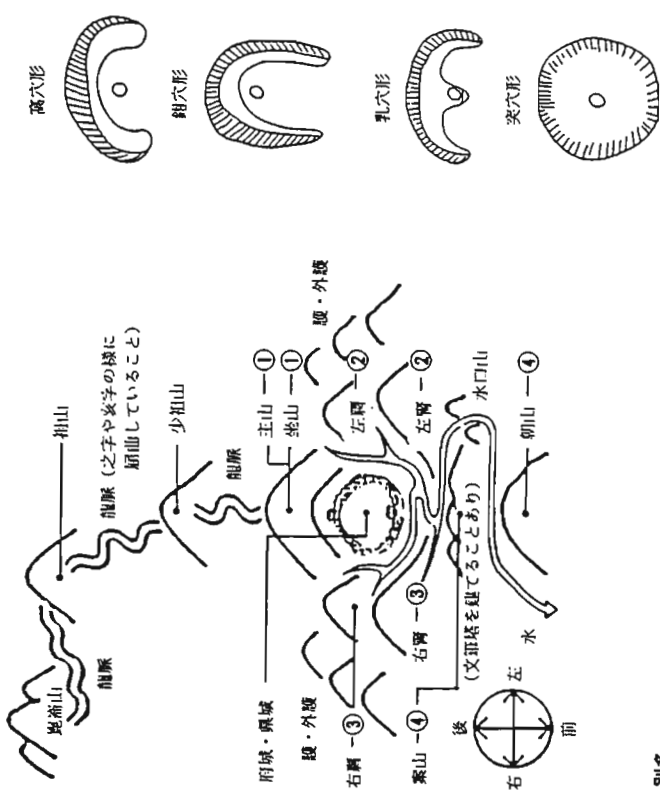


図6 四像
任東權「朝鮮の風水」による

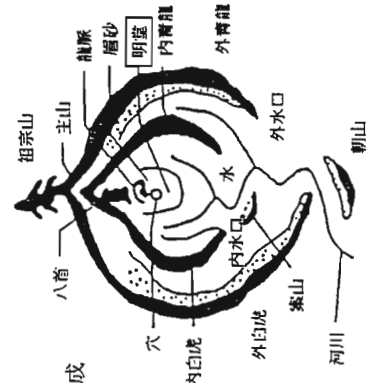
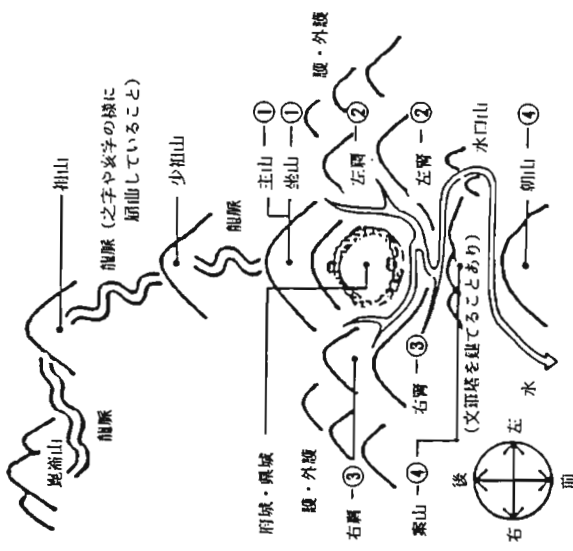


図5 理想的水
渡辺欣雄「風水思想と東アジア」による



- 別名
 ①—玄武、後山、後殿、背山
 ①—案山、枕山
 ②—青龍、左翼、左輔
 ③—白虎、右翼、右弼
 ④—朱雀、前山、前山
- 順次敷二による

風水思想より見た中国代城市の基本的形成

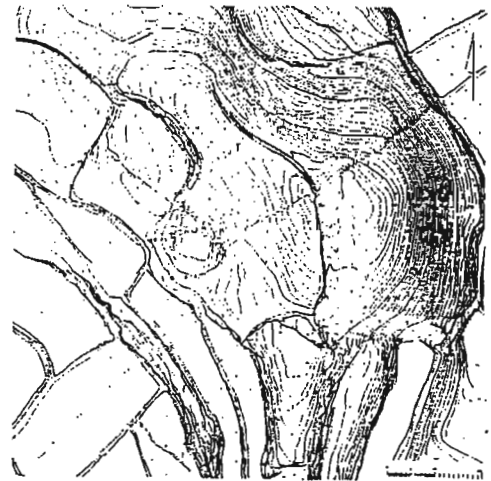
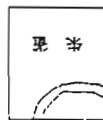
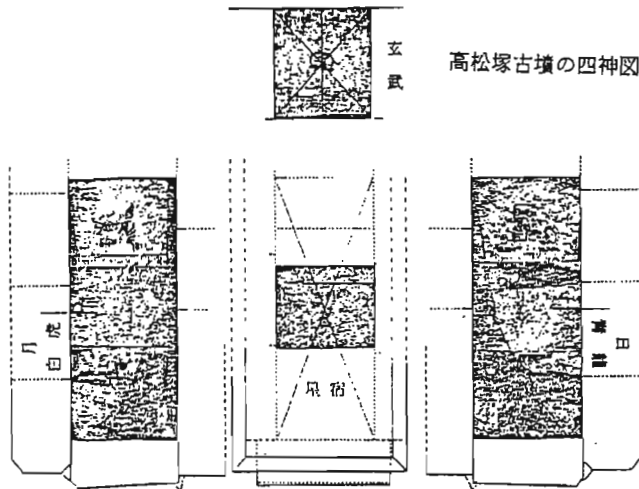
し出すところにこそ存する。局と呼ばれる龍穴を抱いた風景には多様なパターンがあるが、おおむね三方を山に囲まれ前方が開けている場所が藏風得水の吉地とされる。わが国の『董誥伝』巻4では、北に高山あり（玄武）、南に沢畔あり（朱雀）、東に流水あり（青龍）、西に大道ある（白虎）土地を、四神相応の地として推奨する。こうした吉地に国都を営めばその国は滅びず、住居を建てればその家は栄えりとされた。一般民衆の間では、とりわけ陰宅としての墓地選定が流行し、人々は争って幸運の穴場を追い求めた。というのも、親をそこに埋葬すれば、死者が安らかに眠りうるだけでなく、その骨骸を媒介にして生気が子孫に感応し、衰運が盛運に、貧賤が富貴に転じると信じられたからである。だが、この墓地風水の隆盛は、特に山がちで耕地の少ない朝鮮の場合、墓地をめぐる争訟（山訟）を多発させただけでなく、国家経済に対しても少なからざる打撃を与えた。→羅盤（この説明は道教事典による）

四神
ししん Si-shen

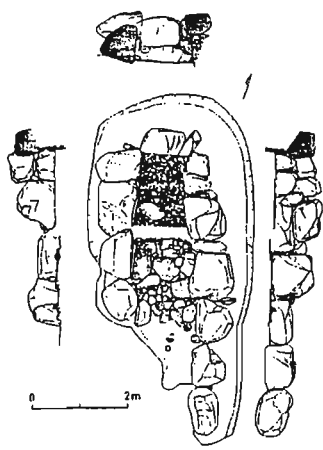
東西南北を象徴する四種の神獣。北は玄武、東は青龍、南は朱雀、西は白虎とされ、それぞれの方向の守護神とするが、通常四神個々を独立して信仰することはない。一般的には、四方から

中央を守るもので、守護すべきものの四方に、これを描くか刻すかして、その存在を明らかにする。四神の歴史は古く、既に漢代の磚や瓦当にその姿がみられるが、初期の文献としては、『周礼』春官宗伯司常に九つの幡旗を記して、交龍の旅、熊虎の旗、鳥隼の旗、龜蛇の旗などが記されているから、おそらくこのあたりにその原形を求めることができよう。また『礼記』曲礼上に、軍行の際の旗列を示して、とあり、四獣の旗を用いて軍行の先後を明らかにした。この場合、東西南北の固定化

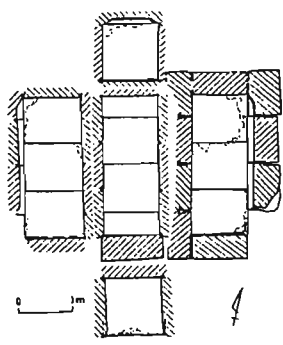
された方向を用いていないが、南面すればこの四獣の配置はまさしく四神のそれにあたる。同様に、『淮南子』天文篇、『史記』天官書は、ともに北を玄武、東を青龍（蒼龍）、南を朱雀、西を白虎（天官書は參星を白虎）とする。一方、緯書『詩含神霧』『河図帝覽嬉』などには、四獣の精がそれぞれ北方黒帝、東方青帝、南方赤帝、西方白帝となったことを記し、五帝神がいわば四獣の応現身であることを示している。以上の資料による限り、四神の信仰は漢～後漢の頃に形成されたもののように考えられる。ところで、四神中の玄武は、宋代に至って、聖祖の諱を避けて真武と称され、天禧6年には真武靈応真君に封ぜられた。また明の永樂6年（1408）には、北京に真武廟が建てられた。四神そのものは、必ずしも道教神とはいえないが、真武神や北極玄武天真武上帝（『月令広義』）となると、宋・元・明の道教信仰と密接に結びつくようである。四神の信仰は朝鮮・日本にも伝わり、特に墓室内部の四壁にこれを描いて死者を守護する風は、高松塚古墳にも見られる。→山田利明（この説明は道教事典による）



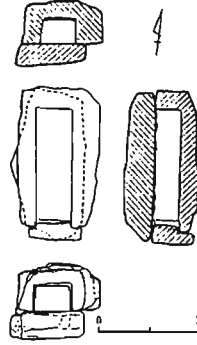
高松塚古墳の立地



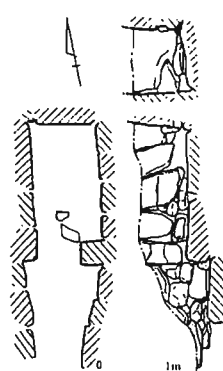
30 真弘寺53号墳



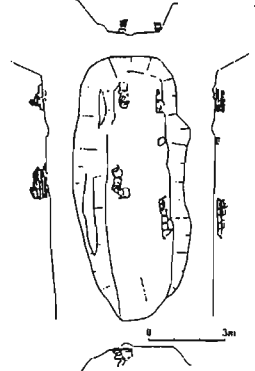
1 石のカタラ古墳



2 滝山御湯山古墳

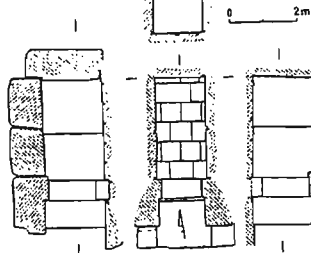


4 石川古墳

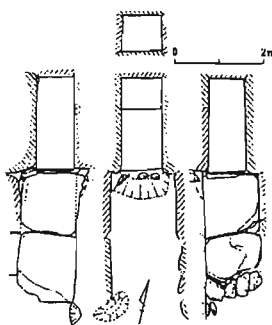


19 神本坂2号墳

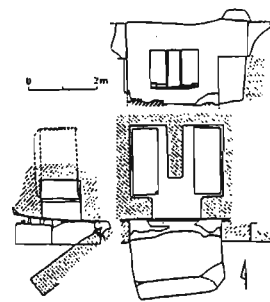
実測図集成(大和) 29



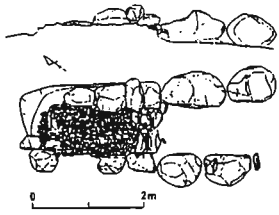
3 平野塚山古墳



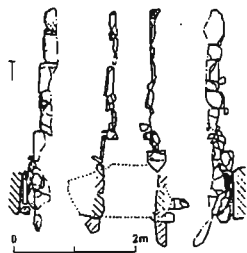
5 巨勢山323号墳



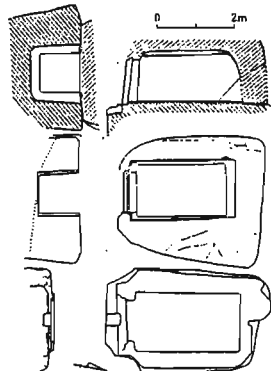
6 桜子塚古墳



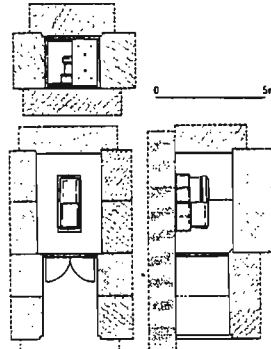
31 真弘寺70号墳



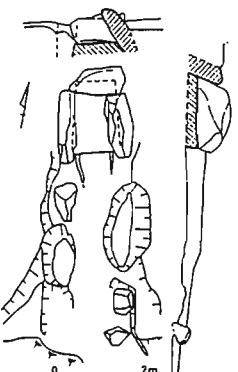
28 オウコ2号墳



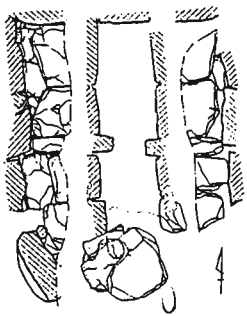
7 美の雲証・畑古墳



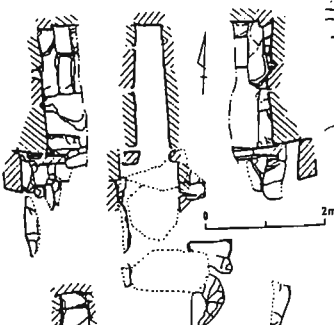
8 天賦・持統陵古墳



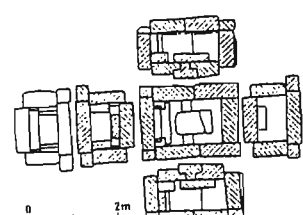
21 上山2号墳



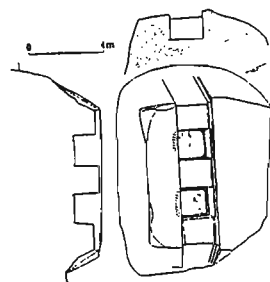
27 オウコ1号墳



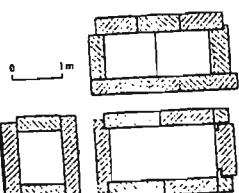
29 オウコ7号墳



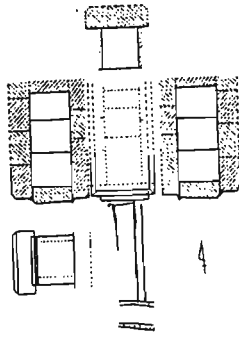
24 兵家古墳



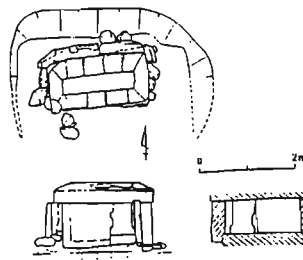
26 森田岩船



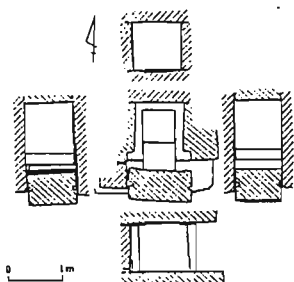
23 平野3号墳



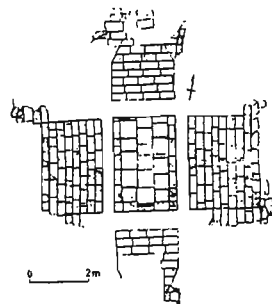
10 松尾古墳



20 烏谷山古墳

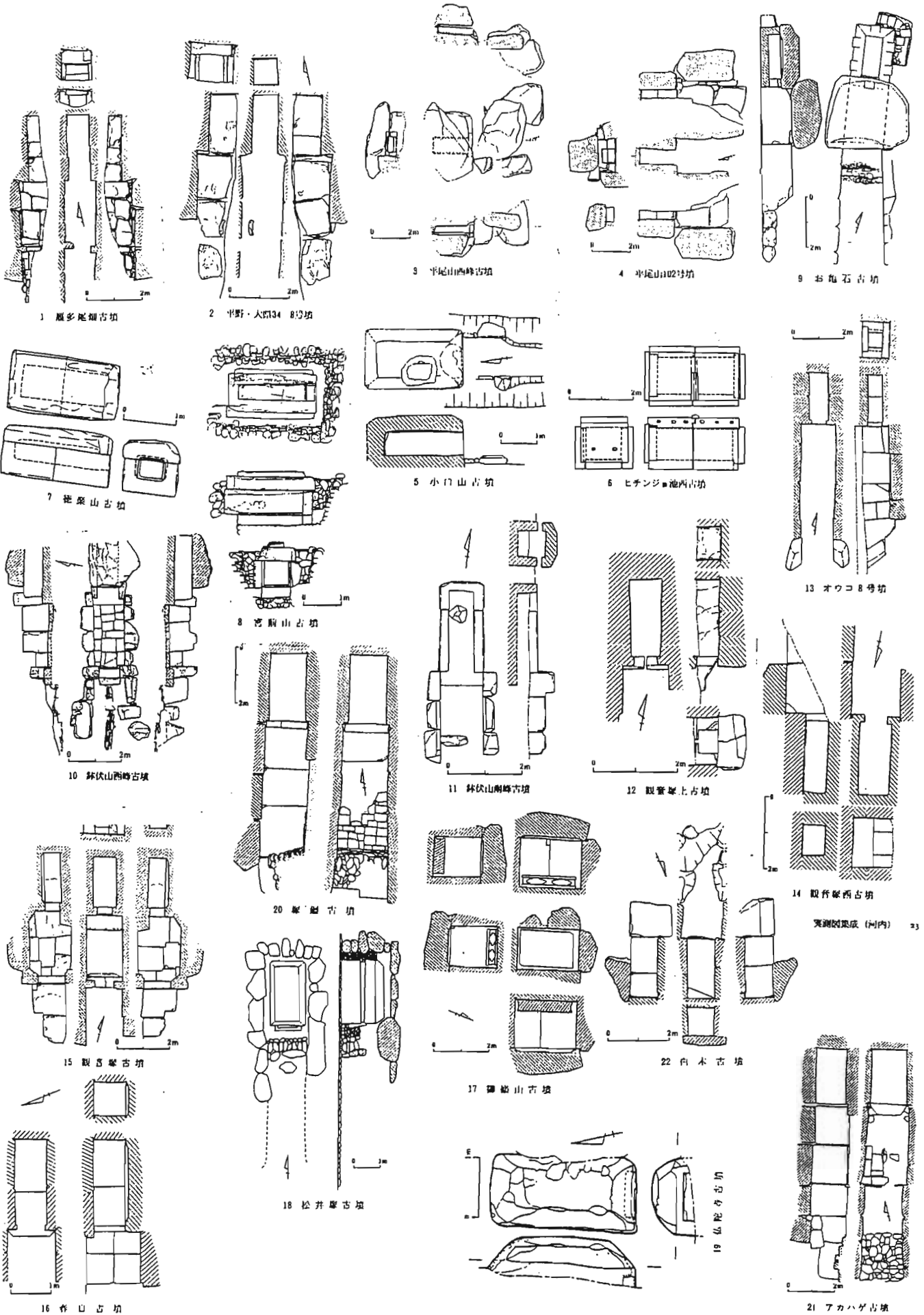


9 中尾山古墳



25 東明神古墳

実測図集成(大和) 31



実測図集成 (河内) 23